

いて行なわれたが、まず優秀児の抽出法に関しては、東京都内の実験校の各学級から1名ずつ抽出する場合、IQ 130以上という条件の他に、学力検査及び学業成績の結果を総合して教師が判定するという点に、地域差・学校差・教師の評価の主観性等が働くために優秀児の内容が必ずしも斉一でないという疑義があること、優秀児判定の基準はもつと多方的な知的能力に求むべきであるという意見とが述べられた。

都市と農村との地域差による知能差の問題に関しては、最近都市化しつつある農村の実体を究明する必要があることと、この差の原因の探究のために、文化的影響の分析と都市への人口移動による選抜的条件の研究とを推進する必要があることが強調された。

知能検査結果の利用の問題に関しては、特に現場の経験に立脚する会員から、単なる記録のための消極的利用の段階に止まる現状を訴えて、もつと積極的利用に進むための具体的方法の指導を要望する強い発言があり、司会者から学習指導・生活指導面における利用法を答え、さらに相関係数の具体的解釈に関しても質疑応答が行なわれたが、現場担当の会員から切実な問題がつぎつぎと提出されて活発な論議が行なわれたことは、このたびの討議の大きな収穫と思われる。(石川七五三二)

人格形成 I

新しい人間形成原理

正 村 史 朗 (京都大)

われわれは人間をモナドとしてとらえるのであるが、この人間のモナドの相位を基底的に規定する本質的構成素材はDNA, RNA その他の各種生化学物質である。

ついで、その人間モナドとしての成立期——胎生、生長期——における生化学的、教育学的、社会学的等々のあらゆる環境との相関によつてさらにその個性の発達が規制せられる。

この場合、当然その形質の発現にあつてそれぞれの環境条件が効果的に作用する発生段階上の臨界点が問題となるが、われわれは人間モナドの素性相位規制の本質的環境条件ならびにその臨界点に関する一仮説を日本心理学会第23回大会および日本応用心理学会第27回大会において提出した。

われわれはこの仮説に基づき、人間モナドの新生期のコントロールによる素性相位の規制をここにとりあげる。

要求水準に関する研究

——成功および地位を中心として——

続 有恒・○松岡 高 (名古屋大)

本研究は特に成功・地位・成功地位の3つの条件で行なつたものであり、その結果を goal discrepancy score とその ratio で表わした。その結果、課題の種類に伴う条件が違ふとしても要求水準の設定が個人個人によつて特徴づけられる。課題を行なうに当つてのルールがあるといつても、その根底に流れるものは、やはり個人の評価で、自己の能力の認知がかなり確立されているようである。

しかしながら地位のルールから見れば、やはりこれくらいはやらねばならないということが含まれるため成功・成功地位のルールに比べると ratio そのものは小さい。

そこでこのように表わした goal discrepancy score を乱塊法によつて処理すると加算・タッピング射的は個人差において1%の有意水準で有意であり、ratio は成功と成功地位条件では個人差および条件差とともに1%有意水準で、地位条件では個人差5%の有意水準で有意である。

Problem solving rigidity と

Spontaneous rigidity との関係

百 名 盛 之 (国際基督教大)

課題解決事態における rigidity と、作業を進める手続きは理解されていながら、つぎつぎに変化する課題に、敏速に適応していくことの困難さとの関係をとらあげた。Luchins の water jar test により、114名の中学1年生から28名のRグループと37名のFグループを選別した。R、Fグループの時計テスト、置換テスト、クレペリン検査の作業量をみると、時計テストの第1試行量はR、Fグループで差はないが、第1試行と第2試行の作業量の差はRグループの方が大きい。置換テストでは、第1試行はややRの方が少ないが第2試行はRFとも同じ。しかし第2試行の最初の1~2分間の作業量はRグループの方が多い。クレペリンについては、Fグループの1分ごとの作業量は定型曲線と同じタイプ。しかしRグループでは4分目をピークとした山型をなしている。全体の結果から water jar で分けたRとFグループは課題に対して異質の set を持っているように思われる。

P—F Study に関する一研究

村 川 紀 子 (平安女学院短期大)

P—F Study における性差、園差の有無を明らかに

し、その原因を追究することを目的として、2幼稚園、2保育園5歳児79名に個人テストを実施した。同時にその両親に田研式親子関係診断検査を実施し、P—Fとの関係を考察した。その結果、外罰反応高く、無罰反応低い児童の父親は、消極的拒否、溺愛、盲従などの態度が著しく、母親は、干渉、不安、盲従、矛盾などに注意すべき傾向を示すことが認められた。外罰反応低く、無罰反応高い児童では、父母ともに厳格型が多く、積極的消極的拒否もかなり大きいことが認められた。また、母親の中には盲従型の著しい者もみられた。外罰反応、内罰反応とも、平均値を示す児童の両親は、ほとんどすべての傾向において理想型を示した。以上から、P—F Studyに現われる反応と親の態度とは密接な関係があるといえるように思われた。性差は若干認められたが、真の性差と断定するには、さらに実験が必要であるように思われた。

幼児における依存性尺度の作成と

それによる研究

依田 新・古畑和孝・

神保信一・○池田 央(東京大)

都内3幼稚園児(山の手、下町)360名の母親を対象に、幼児の依存行動を測定するための質問紙が作成された。項目は具体的日常生活場面から採り、親との接触、注意、助力、承認等を求める行動が含まれる。約250項目中の原材料より、内容分析項目分析の結果22項目が残された。信頼性係数は折半法で0.75であるが、各項目間相関は低く、依存性は単純な操作的概念では説明され難いと思われた。この尺度と家族構成家庭環境との関係では、兄弟数の多いもの、一人子や長子、祖父母や母親のみの家庭の子等は依存性尺度値の平均が高く、また生活の苦しい家庭や逆に子供部屋があるとか、こづかいをきまづて与える家庭の子は平均が低い等の興味ある事実が確認された。

幼児の人格診断法の研究(1)

○肥田野 直・井上健治・新田 陽(東京大)

○松本恒之(科学警察研)

I

本研究はdoll play法による幼児の人格診断と家族関係(文部省科学試験研究 代表者・依田 新)の研究の一環としておこなわれた。

doll play法と比較対照するために、ShneidmanのMAPS(Make A Picture Story)法の構想をかりて、8枚の背景と17枚の人物像からなる1種のプロジェクト

ィブ法を作成した。背景は家庭生活の代表的な場面(ただし人物は描かれていない)に限り、人物像は祖父母、父母、兄弟、姉妹、および乳児とした。この用具を5～6歳の幼児に個別に呈示し背景ごとに自由に人物をえらんで、配置させ物語をつくらせた。結果の分析解釈にはいろいろの方法が考えられるが、登場人物の数と交渉の方向、作話内容の一貫性、作話にみられる固執的傾向、作話の拒否、特に白紙の背景に対する作話の内容、作話にみられる攻撃的傾向などについて検討をおこなった。

II

ここでは、MAPSのみを施行した幼稚園児14名、MAPSとdoll playとを施行した4名の結果を検討した。前者では習慣的日常生活が多く特に問題を発見できなかったのが9例、家庭環境の問題点がみられたのが3例、人格に問題ありと思われる場合が2例であった。その所見は、正常者では自己の生活環境が動的に表現されるが、問題児では静的で、人形の使用数が少なく、それらの間の交渉がなくrejectおよびそれに準ずるものが多いことが顕著である。MAPSとdoll playとを比較した所見は、一致する点も多いような印象である。

結論として、正常児と不適応児はこのテストでも識別可能のようであり特に人形数、人形間のinteractionで顕著のようである。テストとして有効性もみられる。白紙作話では以前の反応の最大公約数的な反応が多いが背景に制約される子はここで問題徴候が現われることがある。

討論の概要

討論は肥田野他の「幼児の人格診断法の研究」に対する質問から始まった。「農村の子供は発達能力に劣るが、農村におけるテストの実施に問題はないか」「問題児を選ぶ場合、行動に問題がある児童は簡単に弁別できるが、そうでなく性格的に根本的な問題がある児童の場合はどうするか」。これらの質問に対して肥田野から「このテストは都市の中流家庭を対象に、家庭環境、親子関係にもとづく問題児をとりあげようとした」との答えあり、つづいて松本金寿より、「親子関係をとりあげる場合、親子関係が作用する背景を考えねばならない。発達段階に応じた依存性も重要であるが、成長に応じた要求の充足関係が大きな問題となってくる。その点での比較がなされるべきではないか」と発言。三木安正より「むずかしいことはいわず、発達とpersonalityとをもつとナイーブに結合できないものか」との提案あり、これに対し城戸幡太郎より「心理学的にpersonalityを考えた場合には、どのようにナイーブに考えてもよい。ただしtestのitemを集めたときその時すでにpersonality観